

第四章 御名が崇められますように

フランシスコ会の修道士がはじめてメキシコの地を踏んだのは、一五二四年のことであった。彼らは現地アステカの高官たちを修道院の中庭で教化していた。修道士たちは、土着の間が古くから信じている宗教を非難した。するとアステカの一人の学者が進み出て、「きわめて礼儀正しく、洗練された物腰で」次のように発言した。すなわち、自分たちの先祖によって重んじられ、守り育てられてきた習慣が、このような形で攻撃され、非難されるのは不愉快である、と。彼は、キリスト教の宣教師たちに次のように述べた。

あなた方は、われわれが主の存在を知らないとおっしゃる。

すなわち、すぐ身近におられ、

天地を創造された主を知らない。

われわれの神は、本当の神ではないとおっしゃる。

しかし、われわれは言いたい。

なぜなら、われわれの心は平穏ではないからであり、不快にされたからである。

われわれの先祖は、

この地上に長く生きてきた先祖は、

あなた方のように語りはしなかった。

先祖は、われわれに生きるための法を与えた。

彼ら自身もそれが真の法であると信じていたものだ。

敬虔な祈りを捧げ、神々をたたえた。

われわれは、われわれの神を知っているし、

誰のおかげでわれわれの命があるのか、

誰のおかげでこどもの誕生があるのか、

誰のおかげで身ごもるのか、

誰のおかげで成長があるのか、

また、神に向かつていかに求めるべきか、
いかに祈るべきかを知っている。

どうか皆さま、耳を傾けて下さり、わが民にこのようなことをしないでいただきたい。
彼らの心は傷つくであろう。

彼らは破滅するであろう……。

どうか、皆さま静かに思いやりをもって考えていただきたい。
それがあなた方に必要なことなのです。

このようなことがあっては、われわれの心は穏やかでいられません。
もちろん、お話を信じることなど……、

気を悪くされるかもしれませんが、

今、聞いたことなどが真実とは思えません。

どうか、皆さま！　これがお言葉に対するわれわれの答えなのです。

“原住民の賢者との対話”

(M・L・ポルティジャ「植民地支配の裏側」Mexico City, 1970, pp. 23-28)

主の祈りの中にこの「御名が崇められますように」という嘆願のことばをよりよく理解しようとするなら、このことばの背後にある体験を思い起こす必要がある。その体験とはすなわち、これまでの考察ですでに論述したものであるが、本章でもう一度取り上げ、その細部を明らかにしたいと思う。

嘆願の叫び

嘆願というものに起源を求めるとすれば、それは発見と欲求である。父なる神はこの世において、客観的にも主観的にも「崇められる」(神聖化される)こともなければ、栄光化されることもない。⁽⁵⁵⁾すなわちこの世の状況は、深い内部矛盾をかかえ、個人間の、また集団間の和合を乱しているの、客観的に神の栄誉は否定される。主観的には、男も女も、そのことばと行

いにより、神の聖なる名を汚すばかりである。

最初に無残な指摘をしなければならない。すでに述べたことだが、人間社会は、その構造においても、機能においても、墮落してしまったということである。健全とか調和をこの世のどこかに求めても、全く徒労のようである。人類の大多数はその抗争と緊張関係のために、正義を養い育てることが出来ないでいる。大多数の人間が敵対する者、破壊する者となってしまう。彼らは皆、捕われ人として生きている。その状態は、自由を求める不安をつのらせるが、それというのも彼らはいつも自由な状態を求めているし、ほとんどいつも望みをくじかれているからである。客観的に言って、われわれは構造的なまた制度化されたデカダンスの状況のもとに生きている。

主観的な状況は、分析的発見を上まわる。それは、倫理的判断も加わるからである。われわれは、神に敵対する悪が暗く立ちはだかつているのに出会う。この悪は罪をまき散らし、それによって人間の分裂、彼らの思い上がりを増殖させている。同時に社会をも分裂、崩壊させている。われわれはもはや、他人の顔を見上げることができないし、兄弟、姉妹とみなすこともできない。

歴史はなぜこのようなものになってしまったのであろうか？ 宗教の立場からその問いに答えるなら——やはり非難、告発のひびきがそこにこもるのであるが——次のようになるだろ

う。すなわち、歴史上の立役者たちが、絶対者によって規制されることを拒んだからであり、神が徐々に忘れられてきたからであり、あらゆる種類の偶像が作られて、神に代わるものとなったからであり、神の御名が呪われているからである。聖書においてヨブがそうであったように、現在の悲惨な世界を見て、神は悪口を言われて当然だと思ふ者は少なくない。他の者にしても、世界中のしみめな人々が不正な目にあっているのに、神が沈黙しているのには耐えられないであろう。彼らは、無能の神にわれわれを助ける力はない！⁽⁵⁶⁾ どうしてその神の名を聖なるものと出来ようか、と言って故意に神を拒むのである。

こうした基本的な欠点が発見されて、嘆願という形がまず願いとしてほとばしり出る。御名が崇められますように！と。これは、イエスのあとに続く者たちの叫びであり、神と仲間たち双方に向けられている。彼らは叫ぶ。神が最後に、その栄光を示されますように！父なる神が、この世の終わりに介入されて、神の秩序を汚すものを終らせますように！人びとが御名をたたえることが出来るような生が送れますように！そして彼らが、神の国に値するようこの世を改善し、変革しようとする勇氣を持てますように！

以上が、「御名が崇められますように」という嘆願の背後にある体験であり、神への願い、叫びを引き起こす体験である。このことをさらに理解するためには、ここで鍵となる二つのことば、「崇める」(聖化する)と「御名」を、明確にする必要がある。

「崇める」と「御名」の意味するところ

聖書に言われる「崇める」(hallow)あるいは「聖化する」(sanctify)ということばは、「たえる」「祝福する」「栄光を与える」などと同意であり、「神聖にする」という意味である。⁽⁵⁷⁾また「聖なる」(holy)ということばの同意語は、「正しい」「完全な」「良い」「純粋な」である。「聖なる」の意味として、これはこれで全く正しいのであるが、「聖なる」の語源にまでさかのぼってみなければならぬ。神聖さは宗教と聖書の間で核となる類いのものであり、相互に関連する二つの意味分野を持っている。その二つの分野とは、「存在」と「行為」であり、前者が存在に関わる問い(神とはどのような存在であるのか? 神の本性とは何か?)であり、後者は倫理的な問い(神はどのように行為するか? 神はどんな行為をおこなうのか?)に関わっている。

まず、「聖なる」という言葉が神について述べられる時、そこでは、神の存在の特別な様態を表現している。すなわち「聖なる神」と言うとき、それは「全く異なるもの」「他の次元」を表わすのである。神はわれわれの住む世界の延長線上にある存在ではない。神とは、全く別

次元の現実存在なのである。われわれの存在、われわれの行為とかけ離れたものとして理解されなければならない。聖書は何度となく、繰り返し、神の名は、すなわち神の本性は聖である、と述べている（イザ六3、詩九九3、5、9、レビ一一44、一九2、二一8、箴九10、三〇3、代上一六10）。神はごく単純なことながら、近づくことの出来ない光の中に住んでおられる（出一五11、サム上二2、一テモ六16）。ということは、神は全くわれわれの手の届かないところにいる。すなわち神は、全く別の世界におられて、われわれから離れている（sanctus の語源の意味は「切り離す」「分かち」「離れて」である）。

主の祈りの中の「天にましますわれらの父」は、この考えを表現している。すなわち「天」とは、見てきたように有限な存在である人間の手の届かないところということを具体的に言い表わしたことばである。聖ヨハネは「聖なる父よ」と呼びかけるが（ヨハ一七11）、ここにも示されている通り、神とは近くて（父）、同時に遠い（聖なる）存在なのである。

神がわれわれとは全くかけ離れたものとする神の存在のこの特別な一面は、われわれにいかなる偶像崇拜をも禁止する。偶像崇拜とは、地上の何かを神として崇拜するものだからである。また、宗教的権力も政治的権力も神の名を利用することは禁じられる。聖なる神の存在に對して人が取り得る態度は、ただひたすら敬い、崇拜するだけである。われわれは「言語を絶

した」存在、同意語のない「言葉」、影を作らない「光」、測り知れない「深み」の存在のもとにあるのである。

神の異なった性質のゆえに、この聖なる存在に対する人間の心理的反応は二重である。すなわち宗教現象学を研究する学者たちの詳細な分析によると、こうした場合人は、逃避しようとする一方で、魅せられ、引きつけられる気持を持つという⁽⁵⁸⁾。人は、聖なる存在の前で、その遭遇した対象が未知のものであり、理解を越えた世界の存在であることから、恐怖感を抱き、逃げ去り、身を隠そうとする。燃える柴の前で、モーセも同様の体験をした。われわれは「ここに近づいてはならない。……あなたの立っている場所は聖なる土地だから」(出三五)という神のことばを聞き、「モーセは、神を見ることを恐れて、顔を覆った」(同三六)ことを知る。しかし同時に、聖なる存在は、人の魂を引きつけ、魅惑せずにはおかない。その存在は、光に満ち、意味において欠けるところがないのである。モーセは、燃える柴の前で、つぶやく。「道をそれて、この不思議な光景を見届けよう」と(同三三)。

以上が「聖なる」の存在論的意味である。次にこの語の倫理的意味を見てみよう。これは、存在論的意味に由来する。このことは、行為(倫理)が存在の結果としてあることを考えてみれば、ごく自然のことといえることができる。この聖なる神、無限の遠方に住まわれる神、全く「異なる」われわれの思考を超えたところに存在する神は、決して厳正中立、無害な存在で

はない。神は、聞く耳をもっているし、われわれに語りかけることもできる。「わたしは、エジプトにいるわたしの民の苦しみをつぶさに見……叫ぶ彼らの叫び声を聞き、その痛みを知った」(出三7)。すなわち神は、いずれの側かに味方をすることができる存在、弱者の側に立ち、圧制者に懲罰を下すことのできる存在なのである。そして「あなたたちを苦しみのエジプトから……乳と蜜の流れる土地へ導き上ろうと決心した」(同三17)と、固く決意なさる方でもある。聖書の神は、われわれの主イエス・キリストの御父であり、そして倫理的な神である。正義を愛され、不正を憎まれる。イザヤはこのことを十分述べている。「万軍の主は正義のゆえに高くされ、聖なる神は恵みの御業ゆえにあがめられる」(イザ五16)と。神は絶対に正しく、完全であり、善である。純粹で一点の傷も、汚れも、あいまいさもない。完全に善い方はお一人だけである(マタ一九17)。

存在論的には遠い(holy)神が、倫理的には近く(holy)なる。すなわち神は、防ぐ手だてを持たない者を救い出し、圧制者にあだを返し、貧しい者と手を結ぶのである。神ご自身が自らの聖なる現実と、われわれの卑俗な現実の間に、橋を架ける。神は、われわれの手の届かない光から立ち上がり、われわれの闇の中に渡ってくるのである。永遠なる「御子」の降臨は、被造物に対する神のこの優しい御心の歴史化と見ることがができる。

神は、ご自身と人間の間を(存在論的に)引き裂く距離を克服した。そして、その神は、わ

れわれの側にも、この距離を乗り越えるようにと求めている。すなわち神と同じように、人間も清らかであること（ルカ一13、二〇22）。『あなたがたの天の父が完全であられるように、あなたがたも完全な者となりたい』（マタ五48、またルカ六36）と。この断定、指示には、人間の立場から見ても重要な要求が含まれている。それは、人類が究極的に目ざすべきは神である、という要求である。神だけがユートピアを具体化できる。つまり、ユートピアの地平に立たない限り、人間は完全に、また正しく理解されることがない。人間は世界の中に、世界と共に生きているが、しかしそこは、人間にとって満足できる場所ではない。人間は歴史的存在ではあるが、その根源的な力は、この歴史の打破を求め、歴史を超えたところで彼らが真に生きることが求めている。

こうした理解は、どのような歴史的全体主義をもはるかに越えている。その中でも特にマルキシズムは、人間を歴史の中の一要因ととらえることによって、人間を社会的関係にもとづく複合物といったものに還元してしまっている。⁽⁵⁹⁾「父」が完全であり、聖であるように、完全に聖くあれ、という求めは、われわれが歴史における下部構造に還元されるものでなく、歴史が実証している枠を越えてなしうる能力を前提としている。ひと言でいうなら、われわれは天に招かれているのであって、地上にではないのである。神へと招かれているのであって、地上の樂園にではない。しかし、このことは、われわれが地上の歴史的使命に背を向けるということ

ではない。むしろ実際はその正反対で、われわれはこの地上と歴史を、それが神の求める最高の理想に到達できるように、高めなければならないのである。

神が聖であるように、われわれも聖であれというこの求めの意味を要約して述べるなら、次のようになるかもしれない。人間は、存在論的には（つまり、神の本性に関して）神に参与するよう求められ、倫理的には（行為に関して）神に倣うようにと求められている。人間は、自分たちがひとりでに完全に己れを脱している時に真実の人間性を見い出すのであり、神の次元へと突き貫けていくのである。人間が真実の自分自身を見い出すのは全く「他なる神」において、「他なるもの」において、である。これが、神が聖であるように聖でありなさいというこの存在論的意味である。

では、この求めは、どうすれば達成されるであろうか？　そこで、再び行動の領域に移る。神が聖であるように、倫理的な意味で聖であれということは、神がそうであるように正しく、善で、完全で、純粹であれ、ということである。この道を歩む者は、やがて神と出会う。正義や善から遠い道を行く者は、たとえ頻繁に神の名をとねえようと、神から遠い。

以上の説明でお分かりと思うが、神と人間の両方にあてられた「聖」という言葉は、分かちもし、結びつけもする言葉なのである。聖という言葉は神の排他的特質であり、種々の被造物

（人や世界や歴史）とは区別された固有性を表わしているの、分離させる言葉である。逆に聖なる「父」は人間の理想となり、人間が完全な人間性を達成する上での到達点であることから結びつけるのである。神とわれわれの間には、（存在論的な意味で）裂け目があるが、交わりもあるのである。われわれは「聖なる方」と関わり、交わりのきずなを保つ度合によって聖くされるのである。そして「聖なる神」は、われわれの内部において聖なる存在にされることを望んでいる。「わたしの栄光がお前の真ん中で現わされる」（エゼ二八22）。様々な抵抗を越えて成立する交わりは、神にあってわれわれが、同時にわれわれにあって神が相互的に必要とされることであり、聖ヨハネによる福音書にきわめてよく示されている（ヨハ一〇27、一七17、19）。これが救済史の法則であり、その頂点に達したのがイエスの受肉の出来事である。

続いて「御名」の意味を論じることにする。⁽⁶⁰⁾このことばをめぐって多くの意味が考えられるが、主の祈りの文脈の中においては、最も重要な意味は一つである。それは、聖書においては、名は人を指すと同時に、その人物の内なる性質をも明らかにする、ということである。すなわち、ある人物の名前を知るということは、単純にその人物を知るということを意味する。神はご自分の名前をモーセに明らかにされたが、つまり、ご自身を明らかにされたということであった。すなわちこの「存在」は、その民と共に歩み、つねにある存在（わたしはあると

いう者だ——出三14）であると。特にイザヤに対しては、ご自身が聖なる存在であると、すなわちあらゆるものを超越しながら、同時にわれわれに強い関わりをもたれる「存在」である、明らかにしている（イザ六3）。

イエスにおいては、神の決定的な名がついに明らかにされる。すなわち「正しい父よ、……わたしは御名を彼らに知らせました」（ヨハ一七25-26）。他の個所では、イエスは神を「聖なる父よ」（同一七11）と呼んでいる。「父」とは神の名である。神は聖なる父として、被造物の限界を破り、同時に天にも住んでおられる。また、「正義の父」として、小さな存在であるわれわれに思いやりを持ち、天幕をわれわれの上に張りめぐらせる。イエスのことばで言えば、神はアツバ——親切で慈悲深い御父——なのである。

解放的神聖化

以上、「聖なる」そして「御名」ということばについて、深く思考をめぐらせてきた。これで「御名が崇められます（聖とされます）ように」という一節への理解が一段と深くなるものと思われる。ここで言われているのは、神は神が在る通りに、すなわち聖なる存在、測りしれ

ない謎、魅惑的であると同時に、畏怖をおこさせる存在、またヤハウエ（わたしはあるという者）として、われわれと共にあり、われわれに救いの手をさしのべてくださる存在、またアツバとして、近くて同時に遠い存在として、全く人間の利害によって繰られたりしないということである。

神の存在のうちで、最も認識しがたいのは神の他者性であろう。神は人間でなく、人間の思考や感情、行動の領域を越えて行為する。彼は「他なるもの」であるが、それでいて、われわれの起源であり、われわれの未来である。神が真実どのような存在であるかを認識しないなら、つまり神はわれわれとは違うものである、ということ認めないなら、それは神をわれわれのエゴの道具におとしめるということであり、われわれの欲望の延長とすることであり、これは深く神にそむくことである。こうした行為は神を拒否するものであり、神が神自身であるという権利（そして具体的にあらゆる存在は個別に異なる）を奪い取り、ついに神を陳腐で、ありきたりの形式的存在にしてしまう。

人間の弱さのために神を「間に合わせもの」としてしまう時、われわれは神の名を聖なるものにしていない。言いかえれば、われわれが助けを必要とする時だけ神を思い出すとか、われわれの幼児的な願望が崩れた時にだけ思い出すとかして神を呼び求めるような場合である。そこで起きているのは、われわれのエゴとして神が存在するということだけであり、神を自分の

利益のために利用しているということだけである。そこでは、神とはそれ自身測り知れない価値を持つ「他なるもの」であるというよりも、いかにわれわれを助けることが出来るかによって認められているのである。われわれが「助ける神」という概念や人間につり合った善いものとしての宗教という概念に閉じ込められたままでは限りの限り、われわれは自分自身のエゴイズムの悪循環から脱け出すことは出来ない。我々の空虚さを満たしたり、願いを叶えてくれたりという場合にのみ神が見出され、尊敬されるというのでは、それはフロイトが示したように幼児期の特性を呈しているというものである。われわれが神にそむくのは、われわれが神を否定する時ではなく、利己的な嘆願をおこなう時、すなわち神をわれわれとは異なり、われわれの手で操ることなど出来ない存在であることを認めない時である。

また、神がこの世の実在物であるかのように、信仰の言葉（われわれの信心、礼拝、神学に関わる言語である）が、神について語るとき、換言するなら、あたかも神と個人的に会談したかのように、神は完全に知られ、余すところなく定義された、神の意志は明白である、といった態度を取るとき、われわれは神を聖としていない。こうした言語や態度は、ただ単に信仰の衣をかぶっているだけで、その実は不敬以外の何ものでもない。そこには「未知なるもの」「神秘なもの」「言葉を超えたもの」の片鱗も残っていない。神を聖なるものとするのに失敗した方法のひとつに、神の啓示をすきのない教義のうちに飼い慣らす信仰の理解とか神学研究が

ある。それは、神の愛の支配を制限し、教会における聖霊なる神の働きを限界づけて、われわれが父なる神に出会っていることが表出される信仰の行ないにおもむくのを制限するのである。

われわれは教会堂を建てるとか、信仰の論文を苦心して仕上げるとか、あるいは宗教的シンボルによって神の存在を社会的に保証することで神の名を聖としているのではない。神の聖なる御名は、教会や論文やシンボルが純粹な心や正義を求める渴望と結びついてなされる時にのみ、完全に聖なる存在となる。その時、神は現実にお臨みになる。そこが神の眞実の神殿であり、どんな偶像もそこにはない。オリゲネスは、主の祈りの嘆願について、次のように述べている。「彼らの神の概念を、正義の概念と是非とも調和させようと心を碎かない者は、神の御名をいたずらに口にして⁽⁶¹⁾いるだけである」。かくして倫理、行為は、われわれが聖なるものとする⁽⁶¹⁾と主張している神が本物であるかまがい物であるかを識別する最も信頼度の高い物差しとなるのである。

われわれが神の名を聖なるものとするのは、われわれ自身の人生の時に、われわれ自身の連帯の行為によって、より平和で、より正しい人間関係を築くことに力を合わせ、暴力に反対し、人間の人間による搾取に反対することである。神自身の似姿に形造られた人間に対して暴力がふるわれる時、神はつねに背かれています。反対に、奪われた者、あるいは暴力の犠牲者の人間的尊厳が回復された時、彼はいつも聖なるものとされるのである。

ここにおいてわれわれは、解放的神聖化という大仕事がわれわれの関与を待っているのを知
る。すなわちわれわれは、それによって神を客観的にたたえ、崇め得る世界、誰もが質の高い
生を享受し得る世界を建設するために、手をたずさえ、努力を傾注していかなければならない
のである。何世紀もの間、キリスト者はこの仕事を自分たちの取り組みべき中心課題と見なし
てこなかった。神聖化すべきものは、個々の人間に集中された。個々人の感情や情念の超克、
心の浄化、靈魂の向上、隣人たちへの慈善、施しに専念すること。また、位階制度や教会法を
持つ教会制度や昔ながらの完徳の道に敬虔に従うことに集中してきた。これらはいずれも、他
に代わるべきものを持たない、測り知れない価値を持つものである。こうした事柄が、人をさ
らに聖くし、新しい心に生まれ変わらせるといふ前進を続ける仕事「イエス・キリストによつ
て……洗われ、聖なる者とされ」と一致する重要事であるのは間違いない。⁽⁶²⁾

しかし、こうした仕事の達成に力を尽くしさえすれば、キリスト者の任務を全うしたと考
えるのは早計である。現実には、個人の問題以上のものである。それは社会の問題でもある。社会
の局面は、個人の殻に閉じ込もっていては、理解できない。社会は、時にいびつであり、不均
衡で不公正、また時に思いやりがあり、参与的、友愛的である。利害、関係、力、機能などが
錯綜した構造をもつ存在であり、これを理解するには社会的な眼が不可欠である。父なる神
が、現在最も腹立たしく思われ、ご自分がないがしろにされていると感じられている部分は、

この社会の領域である。この領域において神の聖なる御名が、真に聖なるものとされなければならない。

神は歴史の舞台で、圧制を受ける者の側に立ち、こうした人びとの解放に向けて闘い、行動する者によって聖化される。御父の聖なる名は、社会の底辺にある人びととの連帯を求める者たち、つまり社会の中で人と人とはより平等な関係を築けるよう闘うという社会的動きの中に参与していく人々によって、最も聖なるものとされる。この世には肉体に直接加えられる苦行のほかに、別の苦行が存在する。それは、人権の蹂りんや迫害、投獄、拷問、安価な賃金による重労働という苦行である。この苦行の頂上に預言者たちや政治活動家たちの姿があり、彼らは力の乱用に立ち向かい、良心があり神聖である神の名のもとに、声をあげて叫ぶ。「律法で許されていない！」（マコ六18）、「相手に損害を与えてはならない」（レビ二五17）と。今日、この新しい形の世界の聖化、世界を聖なるものに変革しようと試みるキリスト者を見出すことが実に稀である。特に既製の、指導的立場にある教会共同体の中に稀である。

イエスは、この道をたどった一人であった。彼は神の国の到来を、緊急事態にある生のため、あるいは心のためにのみ宣言したのではなく、この世の全領域、全人類のために、宣言したのであった。イエスが心に描いたのは、新しく生まれ変わった人間だけではなく、新しい天であり、新しい地であった。新約聖書がイエスを神の聖者として（ルカ四34、マコ一24、ヨハ

六六九)述べたのは、決して偶然のことではない。すなわちイエスは、この世を清め、神の栄光をたたえるに最適の場とする方なのである。彼は宇宙を構成するすべての物、人間、歴史をそれらが聖なるものとなるようにもう一度並べ変えるのである。⁽⁶³⁾

この地上と人類が清められる時、神の栄光が輝やきわたる。聖書においては、「栄光」ということばと「名(御名)」ということばが、しばしば同じ文脈に登場する。神の名が尊ばれ、栄光あるものとされなければならない、と(詩八六9、12、ヨハ一二28)。言いかえれば、われわれは神は神であると認識しなければならない。また、たとえ矛盾があろうとも、歴史の主である聖なる父に従わなければならない、ということである。大事なのは、世界が、真に神的な現実とは何かに気づくことである。男女すべての人間が、絶対的な起源であり、絶対的な意味であり、そして森羅万象の未来である真の神を呼び起こし、その神と交わる信仰のあり方を論議することである。

御父の御名を聖とするということは、イエスに従う者たちの集団である教会が遂行すべき根源的事業である。教会は御父の存在、御父の偉大さ、御父の勝利をほめたたえる。それゆえに教会はそれ自身が、父の、そして世界における父の栄光の、秘跡(サクラメント)なのである。神を聖とするとは、現在の世界がいかに神の意志に反する方向に動いているように見えようと、神をほめたたえ、賛美し、その栄光を喜ぶということである。何が起ころうと、すなわち

次々と悲劇が生起し、蛮行が荒れ狂おうと、歴史にはわれわれが認め、受け入れるに十分なほどの明確さで、神の姿が示されている。涙で笑いが溶かされることはないし、悲しみによって心の歎びが腐らされることもない。このことを語り、繰り返し確信し、祝うことこそ、すべてのキリスト者の共同体の重要な使命である。

「御名が崇められますように」という嘆願の一節にも、終末論的要素が含まれている。われわれは歴史において、限界を乗り越え得ること、そして完全に正しく、純粹で、聖なる世界を構築し得ることを発見する。誰もが望む最大のものは、正義、平和、そして愛であるが、それらが、われわれの世界に永続する住みかを見い出すとは、とても思えない。そして、(社会的機能、社会的役割における均衡というより)人びとの間における調和、均衡としての正義は、つねに影の薄い立場にある。欲求と満足のバランスがとれ、破壊的な対立がなく、自由を享受できる状態としての平和は、つねに脅威を受け、危ういところに押し込まれている。自発的に自らを与えて相手との交わりを持つことを本質とする愛は、非常に安易に習慣のメカニズムや、儀礼の物神化や、規則の重圧に屈している。それゆえにわれわれは、歴史がなし得ないことの実現を神に願ひ、すべての人間、すべての社会が聖くされるようにと祈りをささげる。神ご自身が、自らの名を聖化しなければならぬ状況となっている。われわれのほうは、神の顕現を願ひ、神がその全能の力とまばゆい栄光を発揮されて全人類の解放をおこなうよう呼びか

ける。「イスラエルの家よ、わたしはお前たちのためではなく、お前たちが行った先の諸国民の間で汚したわが聖なる名のために行く。わたしは、国々の間で汚されたわが大いなる名を聖なるものとする」(エゼ三六22-23)。この出来事は歴史の終末論的終局を予示している。神は神となり、われわれは、神の息子、娘となるであろう。誰もが神をたたえ、喜び、歌うことになろう。われわれのただ中におられる聖なる神は、大いなる方! と(イザ一二5-6参照)。そうならばはや、実現されない希望のために「御名が崇められますように」と祈ることはない。なぜならその時には、御名は常に、聖なる御名となっているからである。